

平棚栽培におけるカキ「太秋」の結果母枝としての徒長枝利用			
[要約] 平棚栽培でのカキ「太秋」は、骨格部や側枝基部から発生した徒長枝を結果母枝として利用すると、慣行の結果母枝利用よりも果実はやや小さいものの雌花着生新梢数が多く確保できる。			
茨城県農業総合センター園芸研究所	平成29年度	成果区分	技術情報

1. 背景・ねらい

(国研)農研機構が育成した完全甘ガキ「太秋」は、大果で甘みが強くサクサクした食感の優れた食味である。茨城県では7ha程度普及しており、一部ではナシ棚等を利用した平棚栽培が導入されている。「太秋」は、樹勢の低下により雄花の着生が多くなり、雌花が少なくなりやすい特性があることから、慣行では30～50cm程度のやや強めの結果母枝を利用している。しかし、成木期以降の樹齢経過とともに、雌花の安定確保が難しくなる問題がある。そこで、平棚栽培における「太秋」について、側枝基部や骨格部の陰芽から発生した徒長枝を結果母枝として利用した場合の雌花着生や生育、果実品質に及ぼす影響を明らかにする。

2. 成果の内容・特徴

- 1) 平棚栽培の「太秋」16年生樹において、徒長枝を結果母枝(慣行の2倍程度の長さ)として利用すると、30～40cm程度の慣行の結果母枝よりも雌花着生新梢数を多く確保できる(図1、表1)。
- 2) 樹冠占有面積1㎡当たりの雌花着生新梢数は、徒長枝区が27.1本で慣行区1(樹齢16年生成木)の6.4本よりも非常に多く、慣行区2(樹齢8年生、若木～成木)の24.3本と同等である(表1)。
- 3) 徒長枝区の平成27年～29年までの収量の推移は慣行区1と同等であり、果実品質においては徒長枝区の一果重は慣行区よりもやや小さく、糖度は試験区間に差がない(図2)。

3. 成果の活用面・留意点

- 1) 本成果は、平棚栽培でのカキ「太秋」において整枝せん定の際に徒長枝のみを結果母枝として配置することをすすめるものではない。慣行の結果母枝利用では、雌花あるいは着果数確保が難しくなってきた樹に対して、従来は結果母枝として利用しない徒長枝が活用可能であることを示す技術情報である。
- 2) 徒長枝を結果母枝として利用する際には棚面に対して水平よりも枝先端がやや上向きとなるよう誘引し、結果母枝が長大とならないよう注意する。徒長枝は骨格や側枝基部の背面から発生しやすく、枝が硬く太いため、誘引するときは折損に注意する。
- 3) 枝が込み合わないよう下向きに発生した新梢や着果している枝の妨げになるような新梢は適宜せん除し、受光状態を良好に保つ。
- 4) 陰芽から徒長枝の発生を促すためには、側枝を強めに切り戻すことが有効である。

4. 具体的データ



図1 「太秋」の結果母枝配置(左:徒長枝利用, 右:慣行, H29年4月ともに16年生樹)

表1 利用する結果母枝の長さの違いが雌花着生および生育に及ぼす影響(平成29年) その1

試験区	樹齡 (年生)	結果 母枝長 (cm)	結果 母枝数 (本/m ²)	結果母枝の長さ別の割合(%)					結果母枝 基部径 (mm)
				20≦, <40cm	40≦, <60cm	60≦, <80cm	80≦, <100cm	100cm≦	
徒長枝区	16	72.8	2.4	25.7	17.2	11.4	11.4	34.3	15.1
慣行区1	16	35.0	5.0	76.0	18.0	3.0	2.0	1.0	11.2
慣行区2	8	34.1	5.5	73.0	22.2	4.8	0	0	10.6

その2

試験区	新梢数/結果母枝(本)				雌花着生 新梢数(本/m ²)	新梢長 (cm)	葉枚数/ 結果母枝(枚)
	雌花着生	雄花着生	無着蕾	計			
徒長枝区	11.3	3.3	3.1	17.7	27.1	31.4	184.9
慣行区1	2.7	6.2	0	8.9	6.4	24.5	82.0
慣行区2	4.4	3.2	0	7.6	24.3	26.1	79.4

※注1) 各試験区は1樹1反復。

注2) 表1その1は全結果母枝を供試し, その2は各区任意に結果母枝20本を供試した調査である。

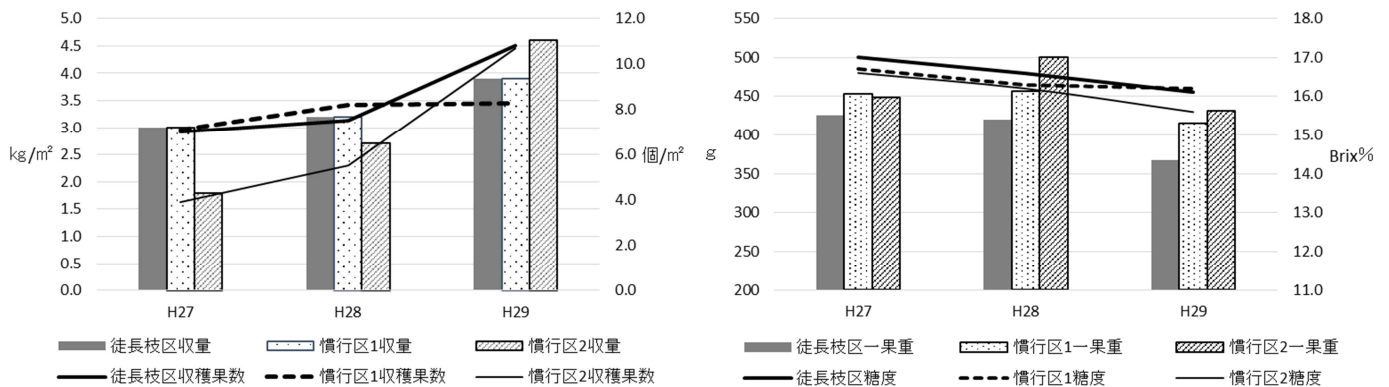


図2 利用する結果母枝の違いによる収量, 品質の推移

※徒長枝区は, H27年から徒長枝利用の結果母枝配置となるよう樹形を改造(整枝せん定方法の変更)した。

5. 試験題名・試験期間・担当研究室

果樹推奨品種決定と生態収量予測・平成25年~29年度・果樹研究室